異常事象に気付く運転士の注視行動

鈴木大輔　山内香奈　松浦理

運転中に前方に発生する異常事象に気付くかどうかに着目すると，運転士の注視行動のあり方が重要だと考えられます。本研究では視線検知装置付き運転シミュレータを用いた異常時対応訓練における視線データ（**図**参照）を分析し，異常事象を発見できた運転士（発見群）と発見できなかった運転士（非発見群）の注視行動の違いを明らかにすることを目的としました。高速走行（約90km/h）と低速走行（約15km/h）の2つのシナリオを分析対象としました。発見群は，高速走行では比較的遠くの正面を長い時間注視していることが多く，前方を奥行方向に深く見ていると考えられました。低速走行では比較的近くの注視点の移動範囲が広く，前方を左右方向に広く見ていると考えられました。これらは，運転士の育成において，「事象が重複した場合に，どこに注意が向いていたのか」等を指導する際に参考となる視線データであると考えられます。

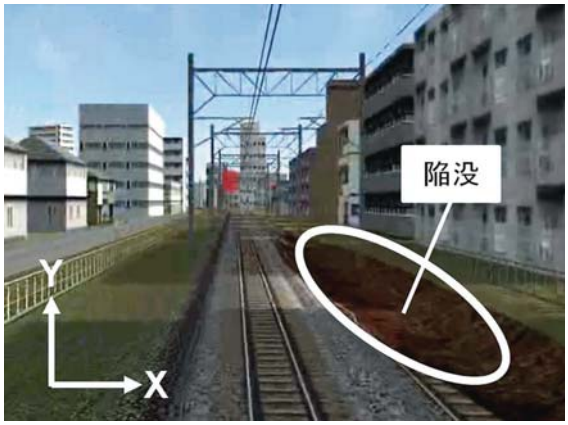

図　異常事象（陥没）の様子＜赤印は注視点の例＞